《西洋史研究室の現在》

時代別演習と専任教員の講義

令和 4 年度　西洋史学演習 I（西洋古代史演習）　担当：准教授　藤井　崇

今年度の古代史演習には、最大で 11 名の院生・学生が参加した。前期には、Alain Bresson, *The Making of the Ancient Greek Economy: Institutions, Markets, and Growth in the City-States*, Princeton, 2016 を講読し、後期には、受講者による研究報告をおこなった。

西洋古代世界の経済は、20 世紀おわりの数十年の間、研究者の主要な関心の的とはなってこなかった。これにはさまざまな理由が考えられるが、たとえば、社会史や文化史の隆盛によって経済史への関心が相対的に低下したことや、モーゼス・フィンレイが古代経済の現代経済にたいする異質性を強調したことで、経済そのものではなく、当時の人々の経済活動への見方や心性が研究者の主要な関心事となったことがあるだろう。しかし、今世紀初頭以降、古代経済史の研究は目覚ましく進展した。近代経済学の概念・理論の適用や考古学調査の大規模なデータ化などを通じて、さまざまな研究がおこなわれている。本書は、こうした研究動向のなかでも特に注目すべき成果である。2007/8 年に出版されたフランス語原著を翻訳した本書は、古典期からヘレニズム期にかけての約 500 年間のギリシア世界を対象に、新制度主義の立場からポリスを中心とした経済のあり方を論じている。今年度は自然環境、エネルギー、農業生産などを論じる、本書前半を講読した。

後期の演習では、昨年と同じく、受講生が 1 週間に 1 名ずつ、自身の研究報告をおこなった。形式としては、各自の研究の意義をより明確にするために、研究報告をおこなう者が自身の研究にとって重要な先行研究（英語文献）を一つ指定し、別の担当者がその先行研究を紹介したのち、研究報告がおこなわれた。また、博士後期課程に在籍する大野普希氏と岡本幹生氏が、共同で「記憶」に関する研究報告をおこなった。さらに、後期の最初には、スロバキアから来日されたマレク・バビッチ博士を交えたワークショップを開催することができた。このワークショップでは、西洋古代史演習の受講生から、岡本幹生氏がネロ帝の記憶について、坂野水咲氏がキリスト教と食の関係について、田中のえ氏がローマ帝国国境地域の軍隊への供給について、藤本俊哉氏がキケロの著作にみられるシチリアの状況について、研究発表をおこなった。

令和 4 年度　西洋史学特殊講義　担当：准教授　藤井　崇

今年度の特殊講義は「ファーガス・ミラーの仕事とその影響」と題して、オクスフォード大学古典学部カムデン教授を務めた Sir Fergus Millar（1935 年～2019 年。以下、ミラーと表記）の学問的業績とその受容をたどりながら、西洋古代史の主要テーマの理解を深めることを目的とした。一人の研究者を講義の主題とするのは少し奇妙に思われるかもしれないが、ミラーの仕事は古代史の相当部分をカバーすると同時に、現時点まで継続する学問的な議

論に深く関わっている場合が多いため、今回の講義を構想するにいたった。

前期・後期におこなった本講義では、ミラーの諸業績を大きく 6 つに分類した。すなわち、「ローマ共和政の基本的性格」、「ローマ革命」、「ローマ帝政期のギリシア世界」、「システムとしてのローマ帝国」、「ローマ世界の皇帝」、「ローマ帝国のユダヤ人」、である。それぞれの分野で、前提となる歴史学的知識を概観したのち、各分野でのミラーの学問的業績とそれに関する主要な一次史料、そして可能なところでは、ミラーの業績の受容（批判を含む）を講義した。

紹介に値する論点は数多いが、「ローマ共和政の基本的性格」における共和主義の伝統への注目、「ローマ帝政期のギリシア世界」におけるポストコロニアリズムの影響、「システムとしてのローマ帝国」ならびに「ローマ帝国の皇帝」における皇帝・臣民間のコミュニケーションへの着目などは、他時代・他地域の研究動向とも共通する部分が多いと思われる。さらに、ミラーの業績全体を性格づける指針として本講義で強調したのは、（ミラー本人も認めるように）ローマ帝国を「東から見る」姿勢である。ミラーは一貫して、古代世界を東地中海・近東地域、さらには中東地域に立脚して描き出した。これは、西洋古代世界を西洋史のなかにどのように位置付けるのかという大きな問題とも関わる、興味深い論点である。

令和 4 年　西洋史学演習 II（西洋中世史演習）／欧米歴史社会論演習ＩＡ（西洋中世史演習）　担当：教授　佐藤　公美（人間・環境学研究科）

2022 年度は人間・環境学研究科・総合人間学部と文学研究科・文学部との共通開講で行う中世史演習第 1 年目となった。したがって単なる文学研究科・文学部の「中世史演習」ではない。私が非常勤講師として文学部・文学研究科の「西洋史学（演習Ⅱ）」を担当させていただいて 3 年目となった一方、人・環＋総人科目としての認知度はほぼ無だったはずだと思われる。それでも文学研究科・文学部側の「中世史ゼミ」構成員に加え総合人間学部生 1 名を加え、間部局的ゼミが成立した。歴史学を専門分野に選んでいたわけではなかった総人生も、西洋中世史学の方法論と考え方をあくまで歴史学の内部から学ぶことと、自らの専門分野の知見と考え方に基づく理解と考察を両立させ議論に活かす、という形できわめて活発に参加してくれ、全体として議論が新しい質の活力を得たように思われた。そこで学生に教えられ、私も考えた。「中世史ゼミ」に安住するのをやめてみようと。それはヨーロッパ中世史学としての専門性を放棄するということではなく、その対極で、むしろ専門性を徹底的に追及することでしか得られない学際性を授業にどう実現するか。しかも専門家同士の越境の試みではなく、学生の関心から発するものからどうつかみ取るか。そこに中世史固有のかたちがあるなら、それをつかまえに行ってみよう、試してみたい、という妙な好奇心が沸いたのであった。ただでは起きない根性を発揮し、状況を楽しもうと思った、と言ってもいい。

前期のテキスト I. Epurescu-Pascovici, *Human Agency in Medieval Society, 1100-1450* (The

Boydell Press, 2021)は偶然ながら（前年度中の教科書指定時点では受講生の学部・研究科構成については知る由がない）そういう考えにまさに適合的だった。タイトルから容易に察せられる通り、P・ブルデューやA・ギデンスの行為理論からアクター・ネットワーク理論に至るまで多様な社会学的・人類学的理論を正面から取り上げ、構造と個人の行為の関係を検証する明示的に理論志向を持った研究だ。行為と構造、個／集団、近代／前近代の二項対立が歴史的実態にうまく適合しないこと自体は特別なことではない。しかし、そこに一つの歴史世界像を描き、自律的な意味を与えるには、単なる部分否定や補足的・折衷的記述を越える明晰な解釈のフレームが必要であり、行為理論はその有力なツールに相違ないのである。面白いのは、Epurescu-Pascovici の研究には明示的で強い理論志向と、史料に関する職人的中世史学の手法が調和的に共存している点だ。扱われる史料は年代記やリコルダンツェ等の中世史料の王道類型であり、史料論的・古書冊学的分析手法も存分に活かされる骨太の実証研究である。各章、各部分の結論の妥当性や論証過程についての批判的考察はもちろん可能だし、授業ではそんな議論も少なくなかった。しかし隣接分野の理論への大胆な接近と高度に専門的な史料研究が背反しないこと、学際性が広く浅くではなく深く徹底すればこその開かれた突破力に存することと、中世史学にしかない専門性がその強力な武器であることを、受講生が多少なりとも感じ取ってくれたなら嬉しい。

後期は各自の専門研究の個別報告を進めたが、図らずも図像学や文献学といった学際的手法に接近した研究関心が目立った一方、手堅い政治史や社会史の手法の中に動きの感じられるものもある。両者はもちろん一つなのだが、受講生一人一人はそこをどうとらえているのか。もう少し踏み込んだ話を聞きたいところであった。

令和 4 年度　西洋史学特殊講義　担当：教授　小山　哲

本年度前期は、「近世ポーランド・リトアニア共和国の文化と社会――多様性とコミュニケーションの視点から」というテーマで特殊講義を行なった。近世ポーランド・リトアニアの国制と社会構造について基礎的な導入の説明をしたのちに、同時代人が社会の階層的な構造をどのように認識し表象していたか、ポーランド語で定期刊行するメディアがどのように成立したか（また、刊行の定期化がどのように失敗したか）、ポーランド王権は情報流通とプロパガンダにどのように関与したか（また、どのような限界に直面したか）を検討した。この前期の授業は、時期的にウクライナでの戦争の初期段階と重なっていた。人文科学研究所の藤原辰史さんと相談して、第 2 回（4 月 20 日）の授業については、藤原さんが担当する ILAS セミナーと合同で「駆け足でたどる「地域としてのウクライナ」の歴史」と題して、中世から現代までのウクライナ史を通観する講義を行なった。

後期の特殊講義は「環大西洋革命とポーランド・リトアニア」というタイトルのもとに、タデウシュ・コシチューシコの軌跡をたどりながら、18 世紀後半のヨーロッパと北米大陸の政治・社会の変動と、そのなかでさまざまな境界を越えて生きた人物の生涯の意味を考察

した。授業を計画した時点では、パリに亡命後のコシチューシコの秘書となるユゼフ・パヴリコフスキの軌跡と交錯させながら話を組み立てるつもりだったが、時間配分がうまくいかず、コシチューシコ蜂起の敗北までで講義を終えることになり、シラバスをみて受講した履修生には申し訳ない結果となった。

令和 4 年度　西洋史学演習 III（西洋近世史演習）　担当：教授　小山　哲

本年度の近世史演習では、Paul M. Dover, *The Information Revolution in Early Modern Europe*, Cambridge, Cambridge University Press, 2021 をテキストとしてとりあげた。ここでいう「情報革命」とは、近世ヨーロッパで生じた印刷・手書きの双方による情報量の爆発的な増大と、それに対応する情報管理（インフォメーション・マネジメント）の技術開発および制度化の総体を指している。著者ドーヴァーの意図は、「情報革命」という概念のもとに、印刷術の導入にともなう変化だけでなく、近世ヨーロッパで生じたメディア環境にかかわる他の一連の構造的な変革――「文通革命」、「科学革命」、「コミュニケーション革命」、行政文書の管理術の発達など――をより大きな文脈のなかで相互に連関させながら総合する、包括的な枠組みを提示することにある。中世後期から 18 世紀初頭までの数世紀にわたる長期的な変化を「革命」と呼ぶことが適切かという問題はあるが、近世ヨーロッパにみられる情報流通の数量的・領域的拡大、情報管理の技術的・制度的変化と、情報爆発に向き合う人びとの実践の多様なあり方をどのように理解するかは、現時点でのヨーロッパ史研究の重要な論点の 1 つといってよいであろう。

後期には、例年と同様に、受講生による研究発表の時間を設けた。王政復古期のロンドンの演劇復興、エドワード 6 世期イングランドの宮廷と地方都市、17 世紀前半のスペインにおける国政改革論、宗派化に対する民衆の姿勢、近世ヨーロッパにおける自己表象としての服飾、1525 年のプロイセン世俗国家化の再検討、スペインの異端審問にみられる宗教的アイデンティティとしての食の問題、近世バルカンのシャリーア法廷における正教徒の処遇、など、今年度も多彩なテーマで発表が行われた。今後も、演習での発表と議論をとおして、受講生各自が課題をより明確に認識し、より豊かな歴史の認識を獲得していくことを期待している。

令和 4 年度　西洋史学演習 IV（西洋近代史演習）　担当：教授　金澤　周作

精読のテキストとして取り上げたのは、Linda Colley, *The Gun, the Ship and the Pen: Warfare, Constitutions and the Making of the Modern World* (Profile Books, 2021)である。著者は世界でもっとも有名なイギリス史家の一人で、現在プリンストン大学教授。邦訳された『イギリス国民の誕生』は「イギリス国民（ブリトンズ）」というアイデンティティの形成を大胆に描いてネイション論の古典となっているし、『虜囚』は一見成長・成功に彩られているイギリス

近世・近代の不安や脆弱さをあぶりだして鮮烈な印象を残した。着眼点と構成力の双方において卓越した歴史家である。彼女は、18 世紀ヨーロッパで本格化しつつも全世界的に看取されるようになった、陸海にまたがり広範囲で大規模に遂行される「ハイブリッド戦争」という現象を背景におき、この新種の戦争への対応の一環として、主として軍人を媒介に、各地でさまざまな憲法的文書が生み出されたという議論を展開する。本書の面白さは、広義の憲法「的文書」群を網にかけることによって、ふつうなら同じ俎上に乗らない出来事を壮大な歴史ナラティヴの構成要素にしたところにある。

1908 年の青年トルコ革命に際会した康有為のエピソードから書き起こし、18 世紀のコルシカ、フランス、イギリス（北米）、ハイチを経巡って、さらにロシア、プロイセン、スウェーデンを射程に収め、合衆国憲法の影響圏として南米、ノルウェー、インド、北米（チェロキー族）での顛末を語り、ナポレオン（法典）の衝撃で生成されたヨーロッパ各地の憲法的文書とリアクションとしてのスペインのカディス憲法を見た後、成文憲法を持たないがそうした文書の伝播のハブとなったイギリス例外論を説明し、ピトケアン、タヒチ、ハワイといった太平洋の島々での憲法制定の成否を眺め、1860 年代に非白人・非キリスト教徒の権利が書き込まれるチュニジア、南北戦争後のアメリカ合衆国、ニュージーランド、アフリカの興味深い事例を紹介し、最後に、外圧にさらされた日本で 1889 年に大日本帝国憲法が制定される経緯と、その後日清・日露戦争での勝利により憲法的文書がさらに中国、インド、中南米、バルカン、トルコなどへ伝播する流れまでを論じ切る。あえて一文で書いてみたが、それくらい息もつかせぬ見事な叙述で、圧巻であった。レジュメに要約するのがもったいないほど、具体的な男女の躍動する個別のエピソードが効いていて、叙述対象の一つである日本に生きる私たちにとって、「誰が歴史を書くことができるのか／書くべきか」を根本的に考える稀有な経験でもあった。ゼミではいつになく話題に事欠かなかった。

上記の文献の他、*Past & Present*（東欧からの大規模移民、2022）と *American Historical Review*（近代米仏国家比較、2021）の論文を各 1 本、そして同じく *AHR* 掲載の特集 Rethinking Nationalism (2022)も読んだ。後期は例年通り自由発表を行った。本年度も、東京大学大学院の梅田建人さんがオンライン受講し大いに貢献してくれた。3 回生から大ベテランまで、多世代で構成するよいゼミだった。